

Title	ジエイ・エス・ミルと経済学の定義(一)
Sub Title	
Author	榎本, 鈺治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.7 (1922. 7) ,p.1034(146)- 1043(155)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220701-0146

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジェイ・エス・ミルと經濟學の定義

一

榎本 鑛 治

「經濟學は何を研究するのであるか」と云ふ質問は何人にも發し易くして、而も之に對する充分な答辨は得られないのが常である。換言すれば、今日經濟學の定義に關しては諸説紛々たる有様であつて、未だ多數の經濟學者を首肯せしめ得る程に完全な定義は、見出し難いのである。他國はいざ知らず、經濟學の祖國たる英國に於ては如何と云ふに、矢張り同様であると思ふ。併し是れは、必ずしも經濟學者の罪と許りは云へまい。現に當代英國經濟學者中の第一人者たるマーシアル氏の如きすら、次の如く云ふて居

るものありとなし、マーシアル氏は言葉を續けて曰く、

「即ち近世の經濟學が主として研究の題目とする産業生活の状態、生産、分配、消費等の問題は、極めて最近時に發生せしものなること、是れなり。是等の問題たる、其外觀に於ける程の變動は實質上には無かりしは、事實疑ふ可からず。近世の經濟學理は、進歩の後れたる人類の状態にも適用し得らるゝこと、皮相の觀察者が思ふ所に勝るもの多々之れあり。然れども多くの異様な形態を一貫せる實質上の統一は、之を看破すること決して容易の業に非ず。前代の學者が苦心慘憺して残せる研究の結果を充分に利用せずして已むは何れの代の學者にも免れざる所なり。」と。(註2)

以上二つの引用に依て經濟學不進歩の原因、從て經濟學の完全な定義——と云ふよりは多數

るのを見ても、明かである。曰く

「人類の幸福安寧に至大の關係を有する問題を研究する學問なる經濟學は、各時代を通じて其最大思想家多數の注意を惹き、從て今日に於ては已に圓熟の境に到達したるならんといふもなきを保せず。然るに事實は、之に反して從來經濟學を以て専門の業となせる學者の數は、其事業の困難なるに比較しては甚だ少數にして、之が爲めに經濟學は今日と雖も未だ幼稚なる状態に在るを免れず。思ふに經濟學が、人類の高尚なる安寧に斯くの如く深重の關係を有することを看破するもの尠なりしは、其一原因なるべく、又た富を研究の目的とする學問は、高尚なる思想上の進歩に専心銳意して身自ら富を得んとの念を有せざる學者に取りては、一見不快の感を與ふるは免れ難き所ならん」と。(註1)

併し經濟學不進歩の原因には、他に更に大なる經濟學者を満足せしむる定義——の與へられて居らぬ理由は、明かにせられ得ると思ふ。然ればさて今日迄の經濟學者は、總て斯學の定義を與へずに經濟學を講義し説明して居たのではない。畢竟經濟學其物が發達の途上に在るので、甲が與へた斯學の定義は、直ちに乙に破られると云ふ有様に在つたまでである。其状態が今日迄繼續して居るので、吾々には、未だ經濟學の定義が完全に與へられて居ない譯になるのである。

茲に私は、經濟學史上の一事實として經濟學の一定義を紹介しやうと思ふのである。即ちジョン・スチュアート・ミルのそれである。

ミルは一八四四年 *Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy* と云ふ經濟書を公にしたが、未だ社會一般の注意を惹くまでには至らなかつたやうである。(註3) 然るに次で

一八四八年 Principles of Political Economy with some of their applications to social philosophy. を公にするに及んで、彼は一躍經濟學界の第一人者たるに至つた。シデホックは此書に就て曰く、

「一八四八年思想の偉大なる解説者(ミル)が一書を著して、前時代に行はれた論争の主要なる成果を巧妙に叙述挿入した。書中に於て、リカードの經濟學説は、數多の必要な説明と、制限を附して提唱せられたし、又他の經濟學者の理に適へる異論や、補足的暗示なるものは、數多く適當に考察せられたのである。斯くて經濟學は、遂に根本的概念と原理とに關しては論争の状態を脱出し、而して將來なざる可く残されたものは、悉く既に設けられた根柢の上に建設せられるであらうと思はれた。ジョン・スチュアート・ミルの言葉が、此信仰を齎らすに

役立つたことは、非常なものである。」(註4)と。兎に角ミルの著書が當時の經濟學者に異常の感動を與へたことは、略ぼ推知することが出來やうと思ふ。是に於て所謂英國正統派經濟學の Silver age が、現出したのである。

翻つてミル自身は、本書の六刊に就て如何なる抱負を持つて居たか。夫れは第一版の序文に明示してあるから、今繁を厭はず左に引用する。「……本書の計畫せる所は、アダム・スミスの大著 (Wealth of Nations) 以來英國に於て著述せられた總ての經濟學に關する論文と相違するのである。……現在の著者(ミル)に取りては、其目的及び一般的概念に於てアダム・スミスの著書に類似しながらも、現時のより、廣汎に亘れる知識とより、改善せられた觀念とに適應する所の著書を六刊することは、現代經濟學の要求する貢獻の一であるやうに思はれる。抑も國富論

二

は、幾多の點に於て陳腐であるのみならず、又全然不完全のものである。……併しスミスの主題を取扱ふ實際的方法と、其原理に就て其後増加した知識とを結合す可き企圖、若くはスミスが英國の哲學に關して物の見事に成功したやうに、現時の至善なる社會的諸觀念を支持せる關係に於て社會の經濟現象 (the economical phenomena of society) を顯示す可き企圖は、未だ嘗て毫も試みられなかつた。斯る觀念こそ、本書の著者が抱懷せる所である。夫れを實現する點に於て部分的に成功することさへ、彼を誘ふて失敗の凡ゆる機會を甘受せしむるには極めて有益の功業であらう。云々」(註5)

ミルが右の如き意氣込を以て公にした著書は、果して所期の効果を收めたるや否や。夫れは今俄かに斷言することが出來ない。更に研究を重ねて私は夫れを是非する積りである。

ミルは其著經濟學原理の序論に於て曰く、「經濟學の主題は富 (Wealth) である。經濟學上の著述をなす者は、富の本質と、其生産及び分配に關する諸法則とを説明し、又研究するのが其職分である。勿論其職分の中には、人間的欲求 (human desire) の此一般的對象(即ち富)の點より觀て、人類或は凡ゆる人間社會の狀態が繁榮に赴き、若くは衰微を來す所の諸原因の作用を、直接又は間接に説明研究することも亦包含せらるゝのである。」

併しミルは左の如く附言して、右の定義を補足して居る。「然れども夫れは、經濟學に關する總ての論文が是等の原因(即ち繁榮に赴き、若くは衰微を來す所の諸原因)を悉く論述し、否列記することが出來ると云ふ意味ではなくして、夫れは、

依つて以て夫等の原因が作用する所の諸法則と諸原理とに就て知悉せる限り、之を擧示するところが出来る」と云ふ意味である。(註6)

扱て前項の定義は、論理の精確を以て知られるミルの與へたものとしては、吾々に甚だしく異様の感を抱かしめるであらう。併し夫れは、決して彼が故意にさうした譯ではない。何故と云ふに彼は、明かに左の如く斷言をして居るからである。即ち

「定義の形而上學的精緻 (metaphysical nicety of definition) を目的とするのは、本書編述上に於て何等重要な部分ではない。(註7)

と。斯うなると私が本論中に論ず可きことは極めて尠少なるが如くであるが、幸ひなる哉、彼の Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy. 中に収録せられた一文は、經濟學の定義てう主題の下に論述されてある。併し

式を以て其科學は如何なるものであるか、又夫れは如何なる點に於て他の科學と相違するか、を示す企圖が始まるが故に、自ら斯の如き形式を組成することが、其科學の立派な研究に先行したものであると推測せられる。併し是れは事實を距ることが遠い。抑も或科學の定義は、殆んど常に科學其物の創造に先行しないで、寧ろ之に附隨したのである。……人間は知的教化の樹立せられるに先立つて、其土地を測量したものではない。彼等人間は、人間的研究の分野を先づ整然と區劃し、次に其土地に据置かれる目的を以て、數多の眞理を蒐集し始めたものではない。即ち人間は、非組織的方法の下に着手したのである。……故に様々の事實も、一定の有意的分類 (any intentional classification) を用ひずに、唯だ個々の類似 (their individual affinity) に従つて彼我に相集つたのである。……斯

二書の間には相違なきや否や。エッヂワース氏に従へば、Essaysと經濟學原理との間には異なる所がないのである。(註8) 殊に Essays に於て論述せられたものは、經濟學原理に於て取扱はれたものに比すれば、遙かに詳密である。従つて解説する上にも甚だ便宜であるから、私は以下前者の論文を解説しながら、後者にも出来る限り論及して、彼の見解を充分に紹介するやうに努める。

三

前記 Essays の第五の論文は、前半に於て經濟學の定義を取扱ひ、後半に於て經濟學の研究方法を取扱つた。彼は經濟學の定義を論ずるに先立つて、先づ科學其物の成立經過を叙述し、次に科學の定義の由來に説き及んで居る。今其大要を左に引用する。

總ての科學に關する論文は、常に簡單なる形の如く組成せられた全體は、屢々全體として云爲せられるので、遂に共通の名稱を得るに至つた。即ち斯く集合的名稱を取得した眞理の一團は、總て科學と名付けられたのである。併し久しい以前から、斯る偶然的分類は、決して正確でないと感じられた。そこで知識の進歩すると共に、様々の企圖も試みられたが、皆拙劣千萬にして、次で與へられた定義も亦頗る不完全であつた。……夫れは何故であるかと云へば、其科學を組成せる總ての眞理に共通にして、而も他の凡ゆる眞理と夫等の眞理とを區別する性質は、抑も如何なるものであるかと云ふやうな研究がなかつたからである。従つて或科學に通曉した人々でさへ、常に確固たる論理的抗辯に遭遇せざるが如き其科學自體の定義を與へるために、多大の當惑を感じたのである。是れ蓋し、夫々の科學に下す様々な定義は、或は廣汎に過

ぎ、或は狹隘に失して、概ね適當のものでないか、若くは充分に目的の科學を追求せず、單に其要素を捨て専ら其偶素を捉へて目的の科學に定義を與ふるがために外ならない。云はゞ或特性に依つて目的の科學に學義を與へたのである。(註9)

四

續いてミルは科學の原理に就いて論じた。之を左に要約する。

抑も或科學の定義は、デューガルト・スチュワートが「凡ゆる科學の最初の原理は人心の哲學に屬する」(the first principles of all sciences belong to the philosophy of the human mind.)と觀察した時に目論見たやうな種類の眞理の中に、置かれなければならぬ。従つて凡ゆる科學の最初の原理は、其科學の定義と共に、從來凡ゆる部門の知識に於て至難未決のものに普遍的であつた所

(what are called first principles, are, in truth, last principles.)點に在る。(註10)

右の如く、ミルが自問自答を試みたのに對して、故大西猪之助教授は左の如く評した、

「……言は嫉まじき迄に輕快に操つられたれども、弄ばれたるは心理的の最終と論理的の最初との相違であつて、之を論理的に最初の原理は心理的に最終の原理なりと書き改むれば、之れが學と術との區別より蕩進して、如何に的確に經濟學認識論の最初にして最終なる問題を指摘把握したるかを學び得る。固よりミル其人が是に下したる解決が果して我等が満足して採用し得べき解決なりや否やは、敢て大なる問題ではない。彼の功績はカントの哲學史上のそれと相同じく、問題の眞の焦點を摘發したるにある。而て正しく問題を提出するは、今も昔も最早や問題を半ば解決したる所以なる事を我等は忘れ

てはならない。」(註11)

次にミルは、問題の最終の原理を論ずる。其最終の原理自體は、其科學の殘餘を支持する證據の連鎖が未決のまゝに依繋して居る定點ではなくして、實は連鎖した證據の遠き彼方に存在する鎖鎗なのである。恰かも凡ゆる他の眞理が、其最終の原理より演繹せられるやうに見ゆるけれど、其最終の原理は、最終に到達せられる眞理に外ならない。即ち最終の原理は、概括の最終時期に於ける、又は分析の最終且極微なる過程に於ける成果 (the result of the last stage of generalization, or of the last and subtlest process of analysis)であつて、而も其科學の特定眞理が依屬し得る所のものである。夫等の特定眞理は、豫め夫自身の性質に固有なる證據に依つて確證せられたものである。(註12)

要するにミルの所説は、最初術と學との混合

したものを一括して科學と呼んだのであるが、其組織的知識の集團も様々の不都合よりして、漸次分化するに至り、學と術との間に何等かの差別を設くるに至つたと云ふに在る。現にミルは、經濟學原理の序論に於て次の如く述べて居る。「人事の凡ゆる部門に於て、實際の科學に先立つたことは、久しいものである。自然力の活動様式に關する組織的研究は、夫等自然力を實用の目的にて使用す可き努力の長い過程に於て遅々として生じた産物である」(註13)

扱て以上は、序論とも云ふ可きものである。是れより愈々ミルは、得意の論法を鋭くするのである。依つて私は、次にミルが當時一般に是認せられた經濟學の定義を批評した處を窺ひ、續いて彼自身の與へた斯學の定義を紹介することをしやう。

(註1) 福田博士著「改定經濟學講義」第一卷七頁乃至八頁

(註9) J. S. Mill, Principles of Political Economy, p. 1 (Preliminary Remarks)

(註10) Mill, Principles, p. 2.

(註11) H. Y. Edgeworth 氏は曰く、「第五の論文に於て取扱つた經濟學の定義は、餘りに簡明であるとは云ひ難いが、經濟學原理の序論に於て採用せられて居る斯學の定義に符合して居る」(Palgrave's Dictionary of Political Economy, vol. II, p. 757.) 尙ほボナー氏も「最初に吾々は廣義に於ける哲學に觸れる所の問題、即ち定義と研究方法との問題に遭遇する。詳言すれば、吾々は、如何に經濟學を定義す可きか、而して斯學の範圍と研究方法とは如何。是等の問題は實は、經濟學の文脈の間に於て常に會得す可きではあるが、併し經濟學原理の如何なる部分に於けるよりも、論集の第五の論文及び論理學體系の第六編に於て一層詳細に取扱はれて居る」と云つて居るのに徴するも、經濟學の定義に對するミルの見解を窺ふためには、經濟學原理を右の論集とを併せ讀む必要があると思ふ。(Bonar, Philosophy and Political Economy, p. 241.)

(註12) J. S. Mill, Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy, pp. 120-122.

(註13) J. S. Mill, Essays, p. 122.

(註14) 大西猪之助氏著「國はたつた經濟學」一四八頁乃至一四九頁

(註15) J. S. Mill, Essays, pp. 122-123.

(註16) J. S. Mill, Principles, p. 1.

Alfred Marshall, Principles of Economics, 7th edit. Chapter I, § 3, p. 4.

(註2) 福田博士著前掲「經濟學講義」八頁乃至九頁、A. Marshall, Principles, pp. 4-5.

(註3) Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy, p. 122. 一八二九年乃至三〇年の間に執筆されたもので、其中第五の論文のみは一八三三年訂正を施して一八三六年十月の The London and Westminster Review 誌上に公表されたものである。(Preface to the first edition of the Essays, James Bonar, Philoophy and Political Economy, 2nd edit. 1909, p. 239. J. S. Mill, Autobiography, p. 180.) 尙ほ之れの語る所に依れば、此論集は公刊して云々云々何等直接の目的を以て執筆せられたものではない。併し其後或書肆に右の論集の原稿を渡して出版させやうとしたが、其主人の拒む所となつた。然るに一八四三年論理學體系 (A System of Logic) の公刊が案外世人の好評を博したので、右の論集も僅かに公刊の機會を得たのである。(J. S. Mill, Autobiography, p. 180.)

(註4) Henry Sidgwick, Principles of Political Economy, 3rd edit. 1901, p. 1.

(註5) J. S. Mill, Principles of Political Economy, edited by W. J. Ashley, 1917, pp. xxvii-xxviii.

以下經濟學原理の引用は、アマゾン版に據る。

新刊紹介

デニール 共編社會主義的重要文獻

宣言綱領集成

社會科學の研究において所謂文獻的研究の必要なのは、こゝに喩々するを要さない。然かも幾千、幾百の星霜を経た社會諸科學の文獻的研究を行ふのは、殆んど人間の一生を捧げても猶ほ足らざる感なきを得ない。この文獻的研究において先づ主要な文獻を閲讀することが、吾々初歩の研究者にとつて最も必要であり、且つ便宜であると思ふ。この意味において、私はデニール並にモンヘルト兩教授の經濟學研究選集の出版を多々せんを得なう。同叢書は原名を *Ausgewählte Lesestücke zum Studium der Politischen Ökonomie*. Herausgegeben und eingeleitet von Karl Diehl und Paul Mombert. *ユズル* 既刊の